

「夜釣り」

三戸 雅史

「昼間釣れてくれればいいのに」  
スズキの夜釣りを始めたときは、そう願っ  
ていた。  
今年の夏、なにか新しいことを始めたくて、  
本を読み、道具をそろえた。  
釣り自体は新しいことではない。小学生の  
ころからやつているので、道具の扱いや、釣  
り場の見極めなどには慣れていている。しかし、  
夜釣りというものは経験がなかった。危険が  
多いと思つて避けていたのだ。  
今回はいま流行りのルアー釣りに挑戦す  
ることにした。狙いはスズキだ。スズキは、  
身近な風景の中で釣れる貴重な大型魚だ。  
夜のほうが釣りやすいのだが、水温が下が  
る季節になると浅瀬に集つてくる。街の明か  
りを頼りにすることもある。港であれば  
常夜灯もついている。昼間のうちに下見をし  
ておけばさほど危険ではない、と本には書い  
てあった。  
かくして夜釣り初挑戦となつた。  
ところどころが釣り場に着いてみると、下見した  
はずの風景はすべて闇の中に消えていた。  
昼間港内を走り回つていた作業用の車両は、  
いまでは静かに眠つている。車だけでなく、  
全ての人工物が動きを止めている。  
かわりに、海水が船べりに当たるチャブチ  
ヤブという音が響く。ときおり、大きめの波

が、釣り人を拒むかのようには寄せてくる。  
海面に目をやると、十センチくらいのボラ  
の子が見える。すぐ足もとから沖に向かって、  
びっしりと湧いている。緑色のじゅうたんを、  
巨大なナメクジが無数に這っているようだ。  
「いま、なにかの拍子でここに落ちたら？」  
襲われる心配はなくても、鳥肌が立つには  
十分なおぞましさだ。  
目をむいて海面を覗き込んでみると、今度  
は十メートルほど離れた物陰で、なにかが動  
いている。普通の猫とは少し違う。全身の毛が逆立  
つていて、獐猛そうだ。これが本来の姿なのだ  
ろうか。鳴き声も違う。威嚇するような、悲  
鳴のような、聞くに堪えない声だ。  
鳥も飛んでいない。首の長い大きな鳥だ。バ  
サバササと大きな音をたてて空中をよぎる。夜  
中に飛ぶ鳥がいるのは不自然なのだが、まわ  
りの不気味さに圧倒されて、はじめは「鳥目」  
という概念すら忘れていた。もはや「なんで  
もあり」といつていい雰囲気だった。明かり  
の届かない漁船の屋根に止まり、悪魔でも召  
喚するかのごとく、ギヤアギヤアと鳴く。  
なぜ、夜に徘徊する動物の鳴き声は、こん  
なにも不気味なものばかりなのだろうか。  
おまけにこいつらは、必ずといつていいほ  
ど付かず離れずの距離をとる。それ以上近づ  
いたら逃げようと思っただけで境界線ギリギリ  
の都合上、そう動きたくはない。

離れたところからこちらを観察しているらしいのだが、暗くて顔が判別できない。さまざまに変化して見えてしまう。ニタニタ笑っているようでもある。黙ってじつと睨んでいて当然にとうべきか、かわいらしく想像してやることはできない。夕テに割れた黄色い目と、ヨコに裂けた大きな口。そんなものばかりが頭に浮かんでくる。リールを巻きすぎてもルアーの先端が竿先のガイドに食い込む。ガチャンという音に、心臓が飛び上がる。確かに、本に書いてあったとおり危険は少ない。足場はきれいで平たく、怪我をする心配もない。しかし、闇が生み出す想像上の障害物が、これほど生々しいものだと思つてもみなかつた。さらに、安心材料であるはずの常夜灯もよくない。独特のオレンジ色をした光が、余計に想像力を刺激してくるのだ。頼むから一匹釣れてくれ。一匹でも釣れば、こんなところからはすぐに立ち去るから」

切実な願いはかなえられない。実を言えば、始めてから四ヶ月もたつのに、まだ一匹も釣れたことがない。スズキ以外の生き物との精神的な消耗戦を強いられて、そちらにはばかり集中しているからに違いない。しかし、不思議と「もうイヤだ」とは思わない。けつして友達にはなれない生き物たちに囲まれた緊張感が、昼間になると懐かしく

なる。

平凡な日常とは明らかに異なる世界が、そこにはある。

今夜もまた、闇の冒険に足が向く。家の明かりを抜け出し、暗い車内で、手探りでエンジンがかかる。ヘッドライトで切り取られた闇が、フロントガラス越しに左右に分かれる。早くも鼓動が高鳴りはじめた。

終わり